

工業振興策のおかげで、 消費型経済の浸透に軌むタイ東北部農村

川村史記

●タイへの企業進出

昨今、ASEAN諸国の中でも、各種産業の生産拠点として、タイへの投資活動が拡大している。その理由は他のアジア中進国に比べて、タイの労働コストが安いこと、投資や貿易に対する規制が少ないこと、政治が安定していること、居住/社会環境が外国人にとって馴染みやすいこと等々があるという。受け入れ側のタイも、政府による各種の投資支援策や、インフラ拡充(港湾整備等)に力を注いでおり、工業振興政策は観光政策と共に同国経済の大きな柱となりつつある。しかし、つい近年までGNIに占める農業の比率が50%程度あったといわれるタイの変容は激しく、バンコクおよびその周辺地域に広がりを見せる急激な工業化の波により、かつての日本が経験したのと同様な、農村人口の都市への流出、村落共同体の崩壊、都市(バンコク)に拡散するスラム等の諸問題を抱えはじめている。筆者はこのたび東京を拠点に、タイ農村との交流を深める民間組織「アジア手織物研究会(注1参照)」のスタディー・ツアー(7月末から8月初めに訪タイ)に同行し、大都市=バンコクに押し寄せる下層労働人口の主たる流出先であるタイ東北部の現状を取材することができた(図参照)。

●厳しいタイ東北部の自然環境

チェンマイの友人連との交流をすませ、バンコク経由で東北部の新興都市「コンケン」へ飛んだ我々が、1時間たらずの短い旅で、顕著に見てとれたことは、チェンマイからバンコクへの空路に展開していた緑のパノ



図 タイ東北部

ラマが、コンケン空港に近づくにつれて、わずかな緑のパッチワークが点在する赤茶けた坵野に変貌したことであった。塩分を吹き出す土壌や、整備の困難な水利等々、農業を取り巻く自然環境の劣悪さにより、面積的には中部平原を上回りながら、米を軸とする農産物の収量低迷に悩む東北地方の厳しい景観(コラート高原の赤色ラテライト)の一端が、はからずも空から確認できたわけである。

アジア手織物研究会と交流のある最終目的地「S村」を訪問する以前に、東北部農村の概況を把握しておきたいという理由から、我々はコンケン市到着の翌日、現地コンケン大学のNGO活動家であるジャリン氏(注2参照)の協力を得て、市郊外に隣接する2カ所の村落を探訪した。ジャリン氏はコンケン大学で教鞭をとる夫人と共に、東北地方の農村開発に尽力している。彼は失敗も交えたさまざまな経験を経て、農村の人々に深く食い込み、農民の信頼を得ている。外国人がタイの村落共同体へ直接足を踏み入れるには、こうした現地エキスパートの理解と協力が不可欠である。彼の手掛けている村の中には、早稲で4年も米(タイ東北部の主食はもろ米である)が収穫できず、今年、再び雨が降らなければ、村を捨てざるをえないといった深刻な状況に直面している地域もあるということであった。

最初に訪れたR村では年配の女性(はた)で布を織っていた。数年前、織物のプロジェ

クトに失敗し、若い婦人層は織物から離れてしまったということであったが、年配の人々の中には織物に達者な婦人も多く、養蚕センターの技術指導を受けながら、桑の栽培などに成果をあげていた。しかし、村有の備蓄用倉庫はあっても米の在庫はなく、魚網を編む副業に精を出す農民の姿も見られた。結局、この村の場合、米を買い喰いしている点や、多くの若者が宝石の研磨等の作業に従事しているなど、村の経済基盤は農業から大きく逸脱しはじめている感も否めなかった。次に訪れたB村では、農業のかたわら比較的若い婦人達が伝統の手織り物に熱心に取り組んでいた。また、年配の婦人達が週2回、2時間程度、小学校で手織りの指導をしている点が注目された。他村からの見学も受け入れるということ、講習用の機(はた)がバナナの木の木陰に設置され、若い女性が指導に当たっていた。これらの村では織物が副業として、何らかの成果を収めているようにも見えたが、これといった組織づくりもなく、布を定期的に買い上げてくれるバンコク出身の女性(仲買人)1人に依存しているなど、その体質はむしろ、その将来は不透明であった。しかも、バンコクへの出稼ぎが若者の魅力となりはじめているこれらの村の今後を想像すると、R村の粗末な保育所で、我々の写すポラロイド写真にはしゃいでいた子供連の何人がこの不毛の地にとどまるであろうか、との思いを強くした。



写真1 塩分がしみてくる荒れた土地での田植え作業



写真2 電柱敷設経用のトラックの前立つ
農村婦人と大学教授、地方官吏



写真3 高床式の農家

●3年ぶりの慈雨

旱魃でからからに干上がり、ひび割れた水田と苦悩の色濃い農民の表情を、2年前に、この地で、目の当たりにしている筆者は、コンケン近傍の村々の農作業や水田の様子から、今年の雨期がかなり順調な降雨をもたらしていることに安堵の胸をなでおろし、仲間と共に最終目的地であるS村に向かった。S村はロイエット県から約42キロ、カセワイサイ郡政府から約16キロのタイ東北部に位置し、塩害(土壌はローム質で、泥土を煮沸すると塩が採れる)、旱魃、脆弱な資源に泣く、極めて貧しい農村である。この地域に約110世帯、700名程度の村人が生活している。彼らは農業だけに依存して生活することはできず、バンコクや各地万都市へ出稼ぎに行く。バンコクで「悪名高い日本人」を相手にする歌舞伎の女性連も、東北出身者が多いという。もちろん、工場で働いたり、物売りをしたり、タクシーをはじめとする乗り物の運転手をしたり、その職業はさまざまであるが、劣悪な労働条件のもとで働くケースが少なくない。S村の場合、出稼ぎに出て行く者は14歳から25歳位の働き盛りの青年連である。一家の収入は仕送りも含めて、年間2,000〜3,000バーツ(1バーツ:約5円)しかない。その中から、種もみ代(あまり、備蓄する環境にないから、毎年、種もみを購入する機会が多い)や肥料代を支払うため、慢性的な借金に苦しんでいる。しかし、これはなにもS村に限ったことではなく、東北部農村の典型である。飢えをしにくために、土壌を食べる子供連が近年話題になった地区さえあるのである。

●ちくはぐな生活環境

〈病める少年〉

S村に到着した夕暮、我々は訪日した1人の婦人(注3参照)の家を訪問した。農作業を終えて、帰ってきていた彼女の傍らで、小学校4年生程度に見える少年が台の上に寝そべっている。病氣らしいので、母親に質問する

と、足の傷からバイ菌が入って腫れてしまったという。説明を聞くまでもなく、その少年の足は膝の上の方まで異様に腫れ上がっていた。我々の子供なら、救急車を呼ぶような危病的症状である。我々はただちに病院へ連れて行くことで一致し、メンバーの1人で教員の森岡氏が、16キロ程離れたカセワイサイの病院へ、少年を車で運んで行った。担当した医師の話では、もう数日手当てが遅れたら、足を切るか、命とりにもなりかねない症状だったらしい。幸い術後の経過はよいと聞いている。

農繁期の忙しさ、介護に当たる親の宿泊料の工面、医療制度に対する不十分な理解等々が絡み合せて、この少年は危険な状態に放置されざるをえなかったのである。親が心配しなだけではなく、心配しても解決の方法が見つからないのである。ちなみに、看病や交通費を助察し、我々がこの少年の父親にカンバした金額は500バーツ(約2,500円)であった。地球規模の南北問題として議論がなされて久しい経済格差、不平等の現実を目の前にして、我々は重苦しい気持ちになった。

〈蛍光灯の生活〉

こうした現実の一方で、S村にも電灯がともっている。いや、電灯を眺みこして、蛍光灯が夜の団欒を照らしているのである。日本で暮らす我々には何も驚くにはあたらないが、筆者が最初に訪れた2年前には電気はなく、小さなアセチレン灯が、食事の手許を照らす程度の薄暗い生活であった(写真2参照)。さらに驚いたことに、よくよくみると我々の宿泊した農家には、テレビ、扇風機、炊飯器までもが揃っているのである。1945年生まれの筆者は、ランプ―電氣―蛍光灯、あるいはラジオ―テレビ等、各種新製品への推移を今日まで、44年の歳月をかけて経験してきているのに、このS村ではアセチレン灯の時代から蛍光灯やテレビの時代へ、2年あまりで一季にタイムスリップしたのである。もちろん、テレビや電氣炊飯器を持つ

ている家庭は少ないとのことであったが、我々の経験からしても、テレビの与える影響、およびその果たしてきた役割の軌跡に目を向けるとき、牧歌的なこの農民社会にテレビの功罪が浸透し尽くす日も遠くないように思われた。それは日本のテレビ教育が農村共同体のあり方に、決定的刻印を押した経験とあまりかけ離れたものにはならないであろう。

ちなみに村人は、道路に敷設された電柱から各家庭へ電線を引き込むのに2,000〜2,500バーツ(距離によって、もっと安い人も、高い人もいる)を支払ったという。その他に、毎月、電氣代に5〜10バーツの出費を余儀なくされている(住居が高床式のため、1階の土間と2階の居間に電灯をつける家庭は5バーツ×2=10バーツかかる)。年間2,000〜3,000バーツの現金収入の中で、こうした新たな出費をやりくりするのは、容易ではないはずである。しかし貧乏の多いS村の中でも、毎月200〜250バーツもの電氣代を支払う家庭があるというから、同じ自然環境を共有しながらも、貧富の差はやはり大きいのである。一般に学校の先生をしている家庭や、バンコク等へ出稼ぎ家族が多い家庭は、こうした消費型の生活に早く移行しているようである。

医療もままならない経済環境でありながら、速く離れた都市の消費生活が容赦なく押し寄せてくるアンバランスを、農民連は出稼ぎと借金という手段で凌いでいる。我々が日本で経験した農村崩壊の危険性の中へ、S村の農民は我々よりも何倍も速いスピードで突入しようとしているようにも思えてくる。

●変わらぬ伝統技術の輝き

こうしためまぐるしい変貌の中で、昔から変わりなく、輝きを放っているのは伝統の技である。S村の婦人連は農閑期になると、高床式住居(写真3参照)の1階土間で、自ら栽培した桑と蚕で織を作り、糸を紡ぎ、染色し、伝統的な手織物“マットミー”を織つ

写真4 伝統の手織物用に糸を紡ぐS村の婦人



ている。粗末な木材と竹を組み合わせた素朴な機を土間に設置し、この世のものとも思えない素晴らしい草木染めの横糸白(よこがすり)の布を織るのである。昔から、彼らは自らの衣裳を、自ら作り出してきた。その伝統は今日まで受け継がれており、最近では副業としての重要性も認識されてきたという。それは村の婦人達にとっては、副収入が獲得できる一筋の希望の光であり、「アジア手織物研究会」もその動向を暖かく見守りながら、援助の手をもっとも友人としてふさわしい方法を差し伸べようと、模索している。「バンコクに行けば稼げるけれども、街の生活の出費はかさむ」、「もう行きたくないけれども、また、行くかもしれない、こうしたゆれ動く心を抱く村の娘達に安らぎが戻るの、機に座って布を織る時であり、機を織っている母や祖母の横顔を見るときでもあろう(写真4参照)。

人権質の高騰、輸出環境の悪化、人材不足等々、先進工業諸国の経済環境が激変する今日、ASEAN諸国の豊富な労働力、低賃金、税制優遇策などを積極的に活用し、新たな市場を開拓すると共に、製品輸出の激しい誇(つば)競り合いを有利に展開しようという狙いから、日本およびNIES(韓国、台湾、

写真5 屋根に降る雨水を溜める大壺(飲料水用)



香港をはじめとする新興工業国・地域)がASEANへの投資を活発化させてきている流れの中で、農村における労働人口の都市流出は避けがたい。ASEAN諸地域の村々ではかかる時代の潮流に沿って、このS村と同じように、あるいはもっと激しい勢いで、その伝統的生活を急速に見失いつつある。それを当然視するか、惜しむか、あるいはその中から、なにがしかの反省を引き出すかは、極めて、我々個々の生きる姿勢の問題であるにしても、望むと、望まぬとにかかわらず、1つの運命に直面せざるをえない。ASEAN地域の人々がいる現実に対して、我々日本人の責任もまた重いといわざるをえない。

雨に恵まれた3年ぶりの順調な天候のもと、タイ東北部S村の農民は農作業に余念がなかった。夜半に降り出したスコールは、開放的な高床式住居の2階に就寝する我々の顔にも、霧のように降りかかった。消費型経済への導火線ともいえる真新しい電柱と電線がいかなる未来をもたらすのか、今は知るよしもなく、雨期を無事に迎えることができた農民一家は音もなく深い眠りに落ちていた。



写真6 帰国後、元気に暮らしている訪日した婦人達S村にて 右端は通訳者

注1:

「アジア手織物研究会(代表はテキスタイル・デザイナー・関谷和子氏)」は東京都新宿区飯田橋に活動拠点を置く、専業主婦、テキスタイル・デザイナー、建築家、教員、編集者等からなる小規模な研究グループで、アジア農村の手織物研究を通して、アジア各地の農村の人々、とりわけ女性層と交流し、アジアの手織物の発展、文化の継承、女性の社会参加の実現、および地位向上に協力するための諸活動を行っている。

注2:

ジャリン氏はフリーライター・有光健氏の友人である。有光氏はアジアにおける各種市民運動の裏方として活躍している。今回の旅に先立っても、我々は同氏から現地におけるさまざまなコーディネートの便を図っていただいた。ここに改めて感謝する次第である。

注3:

アジア手織物研究会は今年5月に、長年交流のあるタイ東北部S村から主婦3名を日本へ招聘した。首都バンコクへ出たのも初めての経験という、これらのタイ農村婦人は約2週間にわたり、埼玉の選生、茨城の結城、東京の八丈島等々、手織物の特産地を見学し、各地で意見の交換や交流を深め帰国した(1989年5月9日付の毎日新聞朝版でも、「織物で日・タイ交流—新宿のアジア問題研究グループ」の見出しで紹介されている)。今回のスタディー・ツアーの目的は、これらの主婦の近況を確認すると共に、彼らを取り巻く今日の生活環境(単純に泣かされ続けられる水田の状況や、出稼ぎ、手織物を取り巻く環境)を、直接的なコミュニケーションを通して、見聞することにあつた(写真6参照)。

